

「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」  
研究成果報告書

研究テーマ（領域）名		意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による「正義」の行動的・神経的基盤の解明		
研究総括	北海道大学	北海道大学		
	文学研究科	文学研究科		
	教授	教授	氏名	亀田 達也
委託研究費		単位：千円		
平成21年度		平成22年度		平成23年度
4,900		3,700		3,600

研究の概要	
<p><b>研究目的</b> 本研究は、行動実験とゲーム理論を軸とする社会的意思決定の研究者、規範的立場から正義論を考究してきた法哲学の研究者、脳イメージングを軸に人間の意思決定過程の神経基盤を探ってきた脳科学の研究者が、分野の壁を越え本格的に連携をすることを通じて、財の分配の問題を中心に、「分配の正義」の判断及び行動的機序と神経的実装を明らかにすることを目的とする。有力な正義原則としての「平等原理」、それと対峙する功利主義的な「効率(efficiency)基準」との深刻な対立は、どのような条件の下でどのように乗り越えられるのか。この問いは、今日の先進社会が共通に抱えている問題である。この問題意識のもと、Rawls の分配の正義をめぐる議論を敷衍しながら、行動科学・脳科学における最新の研究技法を用いた厳密な実証の俎上に載せ、その規範的・行動的・脳科学的基盤を探ることを目的とする。</p> <p><b>研究内容</b> 平成21年度は、Rawls の分配の正義の概念を実証可能な形に置き換えるための基礎的作業（概念的解析と行動的測定法の開発）を行った。最初に、“無知のヴェール”、“原初状態”などの鍵概念を「行為と結果の随伴関係における不確実性」として操作的に定義した場合に、Rawls の主張するマキシミン原理/平等原理が社会的な分配則として安定的に成立し得るのかどうかについて、規範的平等概念の再検討や進化ゲーム理論に基づくモデルとエージェント型コンピュータ・シミュレーションにより、理論的に検討した。次に“無知のヴェール”状況を人工的に作り出し、300名ほどの実験参加者を対象に「将来の財の分配を統べる社会設計原理として平等原理/マキシミン原理が自発的に全員一致で選択されるのか」について、予備的な検討を行った。平成22年度には、前年度の実験を引き継ぐ形で、社会的分配場面でどのような原理・価値が根本的な対立軸を構成するのかについて、規範的観点から整理すると共に、実証的な検討を行った。一連の行動実験から、投資行動に代表されるような人々の「リスク下の個人的意思決定」と「分配に関する社会的意思決定」における人々の実際の選好が、選択問題の、総効用に関わる要素（社会的分配の全体効率/賭け・投資の平均リターン）と、分散に関わる要素（社会的な所得格差/リターンのばらつき）の間の葛藤問題として、共通の構造特性のもとによく記述できるという経験的事実を確認した。こうした行動的連動が分配に関する社会的決定とリスク下の個人的決定を共通にコード/制御する神経的基盤に由来するという可能性を検討するため、脳イメージング実験を実施した。平成23年度には脳イメージングデータについての詳細な解析を進めると同時に、後続実験を準備し、それらと平行して規範的意思決定の哲学的分析を進めている。また、一般市民サンプルを含む多様な参加者（社会階層などのデモグラフィック要因を考慮した参加者群）を用いた行動実験・インターネット調査を行うと共に、正義原則を支えるとされる「正義感覚」が共感(empathy)とどのような関係をもつのかについても、規範的共感理論の整理や、生理計測を含む実験を開始している。同時に、本研究から得られた認知・行動・生理・脳科学的知見を規範的議論と接合する作業を進めている。</p> <p><b>成果や波及効果</b> 本研究の成果は <i>Psychological Review</i>, <i>Current Anthropology</i> を含むトップジャーナルに10を超える国際学術論文として公刊されている。同時に、心理学、経済学、脳科学、法哲学、倫理学、生物学、霊長類学を含む多領域の研究者が集う数多くのシンポジウム・ワークショップにおいて、本研究の知見を公開している。シンポジウム等の開催を通じ、社会脳科学と意思決定科学の連携に法哲学・倫理学領域の研究者が参加する形で、実証を基盤とした新しい対話コミュニティが形成されつつある。</p>	